

モーセの生涯 (2)

2008. 09. 09 (火)

ベック兄メッセージ (メモ)

引用聖句

出エジプト記 2章 11節から22節

こうして日がたち、モーセがおとなになったとき、彼は同胞のところへ出て行き、その苦役を見た。そのとき、自分の同胞であるひとりのヘブル人を、あるエジプト人が打っているのを見た。あたりを見回し、ほかにだれもいないのを見届けると、彼はそのエジプト人を打ち殺し、これを砂の中に隠した。次の日、また外に出てみると、なんと、ふたりのヘブル人が争っているではないか。そこで彼は悪いほうに「なぜ自分の仲間を打つのか。」と言った。するとその男は、「だれがあなたを私たちのつかさやさばきつかさにしたのか。あなたはエジプト人を殺したように、私も殺そうと言うのか。」と言った。そこでモーセは恐れて、きつとあのことが知れたのだと思った。パロはこのことを聞いて、モーセを殺そうと捜し求めた。しかし、モーセはパロのところからのがれ、ミデヤンの地に住んだ。彼は井戸のかたわらにすわっていた。ミデヤンの祭司に七人の娘がいた。彼女たちが父の羊の群れに水を飲ませるために来て、水を汲み、水ぶねに満たしていたとき、羊飼いたちが来て、彼女たちを追い払った。すると、モーセは立ち上がり、彼女たちを救い、その羊の群れに水を飲ませた。彼女たちが父レウエルのところに帰ったとき、父は言った。「どうしてきょうはこんなに早く帰って来たのか。」彼女たちは答えた。「ひとりのエジプト人が私たちを羊飼いたちの手から救い出してくれました。そのうえその人は、私たちのために水まで汲み、羊の群れに飲ませてくれました。」父は娘たちに言った。「その人はどこにいるのか。どうしてその人を置いて来てしまったのか。食事をあげるためにその人を呼んで来なさい。」モーセは、思い切ってこの人といっしょに住むようにした。そこでその人は娘のチッポラをモーセに与えた。彼女は男の子を産んだ。彼はその子をゲルシヨムと名づけた。「私は外国にいる寄留者だ。」と言ったからである。

今日も、引き続きモーセの生涯を学んでいきたいと思ひます。

前回は、『わがしもべモーセ』という題名で、まことの神のしもべとなるために欠くことのできない必要なこととは何か、六つの土台石に分けてお話ししました。

1. 競争と戦い

神のこどもは信仰生活の生涯を通して、超自然的なこの世の力と、また悪魔からの攻撃に対して戦っていかねばなりません。昔、ベアテンベルクの神学校の校長先生は、私たち学生に向かって言いました。「悪魔の攻撃や、悪魔の憎しみを知らなければ、あな

たの信仰生活は全く役に立たない」と。確かにそうです。

2. 信仰と信頼

世に勝つ勝利は私たちの「信仰」です。「信仰」は全能なる主との交わりです。ですから「信仰」のあるところには不可能なことはなく、恐れもありません。

3. 自由と解放

もし、主がモーセを解放しなかつたら、モーセは「神のしもべ」とならなかつたでしょう。モーセは「死の川であるナイル川」から、またこの世の影響から、荒野の孤独から、宗教的な煩わしさなどからも主によって引き出されました。解放されました。

4. 主のご支配

「わたしはあなたの住んでいるところを知っている。そこにはサタンの座がある。(黙示録 2 : 13)」とあります。モーセは、主なる神のご計画によってエジプトで生まれました。そこには、パロの支配、この世の支配がありました。しかし、このサタンの支配の背後には、「主のご支配」がありました。

5. 異種のもの

モーセは、自分がエジプト人とは違ったものであることを自覚していました。この「異種のものである」という自覚は、「主のしもべ」としての力の源です。

6. おのれを捨てる

モーセは罪のはかない快樂にふけるよりは、むしろ神の民と共に虐待されることを選び、キリストのゆえに受けるそしりを「エジプトの宝に優る富」と考えたのです。イエス様は、「だれでもわたしについてきたいと思うなら、自分を捨て、自分の十字架を負い、そしてわたしについて来なさい。(マタイ 16 : 24)」と。

これまで述べてきたような主なる神の訓練がモーセになかつたら、モーセはどのようなになったでしょう。もしモーセにご奉仕のための八十年間の訓練がなかつたら、続く四十年のご奉仕において、モーセに何ができたでしょう。もし、モーセにこの訓練の時がなかつたら、荒野で四十年間さまよったとき、モーセはイスラエルの民に対してどのような方法を講じようとしたでしょう。

今日は、三つの点に分けて一緒に考えたいと思います。
第一番目、目に見えるエジプトからの分離。
第二番目、心の中のエジプトからの分離。
第三番目、荒野での教育。

*第一番目、「目に見えるエジプトからの分離」です。

使徒行伝 7 章 2 3 節を見ると、次のように書かれています。

使徒の働き 7 章 2 3 節

「四十歳になったころ、モーセはその兄弟であるイスラエル人を、顧みる心を起こしました。」

と記されています。関連していることばは、ヘブル人への手紙 1 1 章 2 4 節ではないかと思えます。

ヘブル人への手紙 1 1 章 2 4 節から 2 6 節

信仰によって、モーセは成人したとき、パロの娘の子と呼ばれることを拒み、はかない罪の楽しみを受けるよりは、むしろ神の民とともに苦しむことを選び取りました。彼は、キリストのゆえに受けるそしりを、エジプトの宝にまさる大きな富と思いません。彼は報いとして与えられるものから目を離さなかったのです。

モーセは、自分がエジプト人と違っていることをよく知っていました。自分はエジプトのものではないことをよく自覚していました。自分が今、このようにしてエジプトにいるのは、主なる神が自分を教育するためにエジプトに置き給うたのだということが彼はわかったのです。この自覚は、やがてモーセをエジプト人から分離させずにはおきませんでした。

モーセは主から選ばれていた者でしたが、今度はモーセ自身が主を選ぶ時がやってきました。今までモーセは、主を「助け手」として経験してきましたが、今度は、主を助け主とするのではなく、「自分を支配なさるお方としての主」を選ぶ時がきたのです。モーセは「主のしもべ」として、全エジプトを向こうにまわして立ち上がるために、エジプトと分離しなければならなかったのです。しかしその時にはまだモーセは、はっきりとした確信を持っていませんでした。モーセはエジプトの中に住んでいたのが、人目にもわかるようにはっきりと分離されねばならない時がやってきたのです。

モーセは、その時の思いつきや、ちょっとした感情の動きからではなく、よく考えて「主の道」を選びとったのです。モーセの心には、エジプトにとどまり続けるのか、または、エジプトとその持てるすべてのものから遠く離れ去るか、の二つの道が置かれていました。今読みましたヘブル書 1 1 章 2 4 節から 2 6 節を見ますとわかります。彼はよく考えました。

主の前に静まり、出した結論は、「私は苦しむことを選ぶ」という態度をとるということでした。なぜかと言いますと、主イエス様のゆえです。どのように、彼はイエス様を知るようになったか知りませんが、しかし、ここにはそのように書いてあるので、間違いなく彼は、「キリストのゆえに受けるそしり」を、エジプトの宝にまさる大きな富と判断したので

しょう。モーセはエジプトの宝がどんなに素晴らしいものであるかを当然知っていたのです。しかし、彼は深く考え、主イエスのゆえにそしりを受けなければならないことを知りながら、「主イエス様」を選び取ったのです。

モーセはその時すでに、主の霊によりキリストを「心の目」で見ました。エジプトの宝を捨て、「主イエス様」を選び取ったのです。エジプトの宝を捨て、主の道を選び取った方は、もちろん「上からの光」によって「主イエス」を見たところにあつたのです。

もう一度、使徒行伝に戻りまして、
使徒の働き 7章22節

「モーセはエジプト人のあらゆる学問を教え込まれ、ことばにもわざにも力がありました。」

この箇所によると、モーセはエジプトの最高の教育を受け、皇太子でもありましたし、未来には素晴らしい地位と名誉が約束されていました。しかし彼はそれを全て捨てました。モーセは、「キリストとその復活の力」を知り、「キリストの苦難」にあずかり、「もっとキリストを知りたい」というただ一つの願いに燃えていました。

彼は、エジプトの王パロの娘の子と呼ばれるのを喜ばず、エジプトが彼に約束しているすべての宝を軽蔑し、少しも顧みずそれを捨て去りました。モーセは、はかない罪の楽しみを受けるよりは、むしろ神の民と共に苦しむことを意識して選び取ったのです。

モーセは、はかない罪の楽しみを捨て去りましたが、罪の楽しみのもっと根本にあるものは、「自分を喜ばせる、満足させる」という「自我」です。モーセはそれらよりも、キリストとの交わりを求めてやみませんでした。交わりは、自己追求の反対です。交わりとは、その人を喜ばせないで、相手を喜ばせようとする事なのです。モーセは、自分のことを大切にしようとしなかったのです。

エジプトから完全に離れ去るこの分離が、どのようにしてモーセの心に起こされたのかはわかりませんが、エジプトからモーセが離れた力が何であるかはもちろんわかっています。それは、「信仰」です。「信仰」は今、「見えるものを見ない」で、「やがて来たらんとする報い」を望みます。モーセは、はかない罪の楽しみを見ず、望まず、むしろ主の民と共に虐待されることを望みました。エジプトの宝をおのれのものとしようとせず、むしろキリストのゆえに受けるそしりを選び取りました。それはすべて、「信仰」がなされたわざです。

へブル人への手紙 11章1節

信仰は望んでいる事ごらを保証し、目に見えないものを確信させるものです。

「信仰」によって目に見えないものが、私たちの経験となってきます。モーセは主との交わりを目で見ることはできていても、実体験をしていませんでした。しかし、モーセは目に

み 見えるところを捨て、目に見えない主との交わりを心から求めたのです。モーセが選り取った道は、新約聖書に記されている表現を借りるならば、「十字架の道」でした。

私 たちもモーセと同じように、目に見えるすべての利益を捨て去り、主をもっとよく知るために心を傾けていきたいものです。恵みとあわれみにより、口では言い表わすことができないほどの「主との親しい交わり」に入りたいものです。

目に見えるエジプトからの分離は必要でした。

*第二番目、「心の中のエジプトからの解放」の必要。

エジプトからの分離は、私 たちにとってもどうしても必要なことです。「分離」することなしに、前進することはできません。この世から分離せずに、霊的な成長は望めません。この世から分離するとその結果、キリストのゆえに受けるそしりや、主を信じ、従うことの苦しみがやってきます。しかし、「そしり」と「苦しみ」を負っていく者になりたいものです。これは、日々まわりに起こることがらです。

もう一度、出エジプト記2章に戻りまして、11節から読みます。

出エジプト記 2章 11節から14節

こうして日がたち、モーセがおとなになったとき、彼は同胞のところへ出て行き、その苦役を見た。そのとき、自分の同胞であるひとりのヘブル人を、あるエジプト人が打っているのを見た。あたりを見回し、ほかにだれもいないのを見届けると、彼はそのエジプト人を打ち殺し、これを砂の中に隠した。次の日、また外に出てみると、なんと、ふたりのヘブル人が争っているではないか。そこで彼は悪いほうに「なぜ自分の仲間を打つのか。」と言った。するとその男は、「だれがあなたを私 たちのつかさやさばきつかさにしたのか。あなたはエジプト人を殺したように、私 も殺そうと言うのか。」と言った。そこでモーセは恐れて、きっとあのことが知れたのだと思った。

「ふたりのヘブル人が争っているではないか」、これは信者同士の争いです。同じことが使徒行伝7章にも書かれています。ちょっと比較してみましょう。

使徒の働き 7章 23節から29節

「四十歳になったころ、モーセはその兄弟であるイスラエル人を、顧みる心を起こしました。そして、同胞のひとりが虐待されているのを見て、その人をかばい、エジプト人を打ち倒して、乱暴されているその人の仕返しをしました。彼は、自分の手によって神が兄弟たちに救いを与えようとしておられることを、みな理解してくれるものと思っておりましたが、彼らは理解しませんでした。翌日彼は、兄弟たちが争っているところに現われ、和解させようとして、『あなたがたは、兄弟なのだ。それなのにどうしてお互いに傷つけ合っているのか。』と言いました。すると、隣人を傷つけていたものが、モーセを押しつけてこう言いました。『だれがあなたを、私 たちの支配者や裁判官にしたのか。きのうエジプト人を殺したように、私 も殺す気か。』このことばを聞き

たモーセは、逃げてミデアンの地に身を寄せ、そこで男の子ふたりをもうけました。」

と記されています。モーセは、エジプトから分離しました。しかしその時、モーセは神の用いられる主の御手に握られた道具となったのでしょうか。決してそうではありません。エジプトからの分離は、出発点にすぎませんでした。「エジプトからの分離」、「主に対する全き明け渡し」、「主の道をたどりたいという願い」、これらがあってもまだ十分ではありません。「これで十分だ」と、私たちは時々考えます。モーセもそうでした。エジプトからの分離を経験した後には、大きな喜びも来るでしょう。多くの人々はそれで終わりだと考え、安心してしまいます。しかし、それは誤りです。「エジプト」から、「この世」からの分離は、単なる始まりにすぎません。

モーセはエジプトから離れ、エジプトから去りました。しかし、モーセの心はエジプトからまだ離れていませんでした。モーセは、自分の心からエジプトが消え去るために、更に四十年間訓練されたのです。モーセは自分自身をまだあまりよく知っていなかったようです。モーセは、エジプトの教育を受け、最高の学問を身につけ、ことばにも知恵にも秀でていました。しかしこれは、この世の学問でした。神のしもべとなるためには、決してこれでは十分ではありません。

私たちは今、聖霊の時代に生きています。この世の学問と生まれながらの賜物は、主のしもべとなるために何の役にも立たない、ということをお霊により深く教えられなければなりません。ですから、私たちは「肉から出るご奉仕」、「自我からでるご奉仕」を徹底的に憎み嫌い、捨てなければなりません。

この使徒行伝7章23、24節を読むと、モーセはこのことを本当に経験しました。彼は、自分はイスラエル人をエジプトから解放する「解放者」であることを自覚していました。しかし、自分が「解放者」であることをイスラエルの民が認めてくれなければ、もちろんだめなのです。そこでモーセは虐待されているイスラエル人を助けようとしたのです。ある一人のイスラエル人が、エジプト人にいじめられていました。それを見たモーセは、主にある兄弟であるイスラエル人を助けようとして、エジプト人を打ち殺したのです。しかし、その結果はどうだったのでしょうか。モーセは神の民、イスラエル人を助けようとし、そして神の敵エジプト人を、殺そうとしたのです。そして殺しました。しかし、その手段は間違っていました。それは「主なる神の方法」ではなかったのです。「エジプトの教育」の方法でした。この世の知恵から得た方法にすぎませんでした。モーセは、エジプトの方法をもって、主なる神に仕えようとしたのです。「自分の知恵」「自分の力」を、用いました。

パウロは、モーセがとったこのような武器は「霊的」なものではない、「肉的」なものだと言っています。モーセの心の中に住むエジプトが表われ出たのです。「エジプトの力と知恵と教育」が、ご奉仕に表われてきました。主なる神は、「この世」の源から出る力やエジプトの方法をそのご奉仕に用いられません。

イエス様の弟子の一人であるペテロも、モーセと同じようなことをしてしまったのです。イエス様を捕らえようとして敵がやって来た時、ペテロは剣を抜いて敵の一人の耳を切つて落としました。その時、イエス様はペテロに「剣をさやに納めなさい」と言われました。そのような耳を切るなどということは、この世の人でもできます。

たとえモーセが、今日一人、明日二人のエジプト人を殺したとしても、イスラエルの民は絶対にエジプトから解放されなかったでしょう。主なる神は違う方法でイスラエルの民を解放なさりたかったのです。モーセは狭い範囲しか見ていませんでした。

主なる神は私たちを用いようとしておられますが、用いていただく前にまず、「主のまごころ」をよく知らなければなりません。主は、モーセを通してイスラエルの民をお救いになりたかったのですが、モーセがとった方法によって民の解放をなさろうとはされませんでした。

主にとっては、まずモーセ自身が問題でした。モーセが神のしもべとなるには長い時間がかかりました。モーセは自らの道を選んで失敗し、絶望しましたが、それはモーセに主の方法を教えようとなさっての主のご配慮からでした。

私たちの場合はどうでしょうか。主は私たちを召し、多くの人々を救いに導くために使命を与えてくださいました。そこで私たちは暗闇にいる人々を光のもとに導き出し、更に主の満たしをいただきたいと、ご奉仕や証しをします。しかし、しばしば失敗し、落胆するのではないのでしょうか。これは自分の真相を知るための主の導きです。

出エジプト記 2章 12節

あたりを見回し、ほかにだれもないのを見届けると、彼はそのエジプト人を打ち殺し、これを砂の中に隠した。

もし私たちが奉仕をするとき、左右を見回してからするようでは本当のご奉仕はできません。エジプトの方法をもってたましいを救おうとするのは、茶さじで海の水を汲み出そうとするのに似ています。私たちはたましいを救うために、まず主と一つにならなければいけません。イエス様は、「わたしから離れては何もできない」と言われました。

主は、モーセと共にイスラエルをお救いなさろうとされました。けれど、もしモーセが一人ぼっちなら、決してイスラエルを救うことはできなかつたはずですが、しかし、モーセは変えられました。モーセは自分自身を知るようになり、また何でもお出来になる主をも知るようになりました。

モーセは二人のイスラエル人が争っているところに行きました。イスラエル人はもちろんエジプト人と違って神の民であり、モーセと心を同じくする民であるはずですが、けんかをしていた二人のイスラエル人はモーセを理解しませんでした。前にモーセがエジプト人を殺したのは、イスラエル人をかばって殺したということを少しも理解してくれませんでした。モーセは自分こそイスラエルの解放者であることを自覚していましたが、イスラ

エル人は理解してくれませんでした。これはモーセにとって一番大きな嘆きでした。

私たちはしばしば自らの力をもって主に仕えようとし、ですから、その結果も自分で責任をとらなければならないようになってきます。モーセも自分で行なったことの結果、自分で後始末をしなければなりません。

モーセはミデヤンの地に逃げ、そこで寂しい生活を送らなければならなかったのです。しかしそのように孤独と悲しみの中に追いやられても、主は私たちを愛し、更に高いところへ引き上げようと心に留めていてくださることを思い見なければいけません。一つのことを覚えましょう。すなわち、あなたはあなたの奉仕に何の責任も負わなくてよいのです。ただ一つ負わなければならない責任は、あなたが絶えず「主との生きた交わり」を持ち続けることです。

一番目、目に見えるエジプトからの分離、二番目、心の中のエジプトからの解放です。

*第三番目、「荒野での教育」の必要。

どんなキリスト者にも、荒野の時代があるものです。荒野はこの世でもありませんし、カナンの国の満たしのあるところでもありません。エジプトとカナンの真ん中に位置しているところが荒野です。主のしもべとなるためには、この「荒野の時代」がどうしても必要です。

荒野の生活で教えられることは三つです。

- ① 不平を言わないで服従すること。
- ② あきらめを知らない忍耐を続けること。
- ③ 強制されずに真実であること。

① まず、不平を言わないで服従することです。

これは暗闇から光に導き出され、やがて主の満たしに至らんとする者にとってどうしても必要な課題です。モーセはミデヤンの荒野でもうけたその子どもに、ゲルシヨムという名をつけました。これは、「とつ国の者」(外国の者)という意味です。

イスラエルの民の解放者モーセは、今や失敗して外国の地、ミデヤンで暮らしています。しかしモーセは失敗の後、暗い不機嫌な気持ちになり、イスラエルの民を解放することはどうでもいいと言って、投げやりにすることをしませんでした。出エジプト記2章15節からもう一度読みます。

出エジプト記 2章15節から17節

パロはこのことを聞いて、モーセを殺そうと捜し求めた。しかし、モーセはパロのところからのがれ、ミデヤンの地に住んだ。彼は井戸のかたわらにすわっていた。ミデヤンの祭司に七人の娘がいた。彼女たちが父の羊の群れに水を飲ませるために来て、水を汲み、水ぶねに満たしていたとき、羊飼いたちが来て、彼女たちを追い払った。

すると、モーセは立ち上がり、彼女たちを救い、その羊の群れに水を飲ませた。

と記されています。もし、モーセが打ちのめされて不機嫌だったら、最初にミデヤンの七人の娘を助けはしなかったでしょう。モーセは、不平を言わないで服従することを学んでいたために、助けることができたのです。

打ちのめされてしまった人は、自分自身を見つめて、同じところをぐるぐる回って立ち上がることができません。十字架を見てください。古き人はイエス様とともに十字架にかかって死んでいるはずですが、自らのうちに何か取り得があると思っているなら、打ちのめされるのです。自らのうちに何の良きところもないことを覚えて、主が十字架にとともにかかってくださった事実を認めることです。

暗闇の中にいる人々を闇から光に導き出し、その人をイエス様の満たしに至らせ、全き人へと導くためには、モーセにとり荒野の訓練が必要だったのです。モーセは主のしもべでした。パウロも主のしもべでした。この主のしもべであるパウロの証しは、コリント第二の手紙の中で、次のように書き記されています。

コリント人への手紙・第二 11章 23節から 28節

彼らはキリストのしもべですか。私は狂気したように言いますが、私は彼ら以上にそうなのです。私の労苦は彼らよりも多く、牢に入れられたことも多く、また、打ち打たれたことは数えきれず、死に直面したこともしばしばでした。ユダヤ人から三十九のむちを受けたことが五度、むちで打たれたことが三度、石で打たれたことが一度、難船したことが三度あり、一昼夜、海上を漂ったこともあります。幾度も旅をし、川の難、盗賊の難、同国民から受ける難、異邦人から受ける難、都市の難、荒野の難、海上の難、にせ兄弟の難に会い、勞し苦しみ、たびたび眠られぬ夜を過ごし、飢え渴き、しばしば食べ物もなく、寒さに凍え、裸でいたこともありました。このような外から来ることのほかに、日々私に押しかかるすべての教会への心づかいがあります。

主なる神のしもべとなるために、この訓練がどうしても必要です。荒野で教えられることは、不平を言わないで服従することです。

② 引込み思案でない忍耐、あきらめを知らない忍耐を続けることです。

このことを学ぶために、荒野の生活は必要です。多くの人々は、忍耐とは何もしないでじっと我慢していることだと思っています。けれど、忍耐はそんなものではなく、そんな消極的なことではありません。

モーセはイスラエルの民をエジプトから導き出したのち、しきりにつぶやくイスラエルの民に対し、何という素晴らしい忍耐を持っていたことでしょうか。もしモーセがあれだけの忍耐を持っていなかったら、イスラエルの民はようになっていたでしょうか。暗闇にいる民を主のもとに導こうとする神のしもべにとってどうしても必要なのは、この「忍耐」です。

「忍耐」はあきらめを知りません。モーセは、自分がどんなに失敗しても忍耐し給う「主の忍耐」を学びましたので、イスラエルの民に対してもあれだけ忍耐することができました。

荒野の生活で教えられることは、「不平を言わないで服従する」ことであり、また、「あきらめを知らない忍耐を続けること」です。

③ 最後にもう一つ、強制されずに真実であることです。

モーセは主から報酬を受けたから、また受けるから主なる神に真実なのではありませんでした。自ら何の約束も報いも望まないで主に忠実でした。

ヘブル人への手紙 3 章 5 節に大切な一文章ですが、次のように書かれています。

ヘブル人への手紙 3 章 5 節前半

モーセは、しもべとして神の家全体のために忠実でした。

モーセは義理の父、ミデヤンの祭司イテロの家畜を「忠実」に飼いました。それと同じように、モーセは主に対しても実に「忠実」だったのです。モーセの心は、いつも主なる神に向けられていました。二心を持っていませんでした。主の前に隠し事を持たず、また少しも主を疑いませんでした。そのモーセは深い絶望に陥れられたこともありましたが、そのような時も、なおモーセの「主に対する忠実さ」は失われていませんでした。

ここまでモーセが荒野で学んできたことをみてきました。すなわち、「不平を言わないで服従すること」、「あきらめを知らない忍耐」、そして強制されずに「真実」であることです。

これらはエジプトでの方法と全く反対です。この世の方法とは全く違います。モーセは四十年間のミデヤンの地における荒野の生活で、心の中からエジプトを全く追い出しました。荒野の生活があった後、はじめて主なる神はモーセにまことの使命を与えることがお出来になったのです。

この荒野の訓練の後、モーセは何になったのでしょうか。伝道者でしょうか。宣教師でしょうか。そうではありません。モーセは「神のしもべ」となったのです。

最後にもう一箇所読んで終わります。

ガラテヤ人への手紙 1 章 3 節から 5 節

どうか、私たちの父なる神と主イエス・キリストから、恵みと平安があなただの上にありますように。キリストは、今の悪の世界から私たちを救い出そうとして、私たちの罪のためにご自身をお捨てになりました。私たちの神であり父である方のみこころよったのです。どうか、この神に栄光がとこしえにありますように。アーメン。

「^{いま}今の^{あく}悪の^{せかい}世界から…」とは、つまりエジプトから^{わたくし}私^{すく}たちを^だ救い出そうとして…です。

10 節

いま^{わたくし}私^{ひと}は^と人^{はい}に取り入ろうとしているのでしょうか。いや、^{かみ}神に、でしょう。あるいはまた、^{ひと}人の^{かんしん}歓心^かを買おうと^{つと}努めているのでしょうか。もし^{わたくし}私^{ひと}がいま^{かんしん}なお人の^{かんしん}歓心^かを買おうとするようなら、^{わたくし}私^いは^いキリストのしもべとは言えません。

パウロも^{おな}同じ^{たいど}態度をとったのです。「^{わたくし}私^{しゅ}の主であるキリスト・イエスを知っていること^しのすばらしさのゆえに、^{そん}いっさいの^{おも}ことを^い損^いと思っています。(ピリピ3：8)」と^い言う^いことができたのです。

了